

索引

人名部

ア行 (ア、エ、ヲ)

阿佛尼	61
明智光秀	282
朝山日乘	73, 75-78, 282
足利義輝	132, 329, 331
足利義晴	131, 329
足利義滿 (鹿苑相國)	33, 125, 277, 314, 325
姉小路濟氏	180
安居院法印	229
安樂房遵西	96, 107-110, 184
草提希夫人	13, 237, 302-304, 306
鴨脚氏	12
一休宗純	193
泉谷惠頓	393
美鷗徹定	139, 145, 147, 150, 151, 153, 361
右京大夫(藤原隆信)	56, 127, 379
右大辨行隆	37
宇都宮朝綱	63
宇都宮彌三郎頼綱入道蓮生	56, 57, 63, 64, 116, 155, 163, 165, 167, 168, 190
上原馬允教廣	218, 300
漆國守	288, 289, 305, 377
漆時國	1, 2, 279
運空	33, 124
慧隱法師	94, 95
懷感禪師	84, 235, 236
惠瓊(安國寺)	77
惠心僧都(源信)	95, 225
惠鑊	219
榮久(城譽)	323
永觀律師	363
教空(慈眼房)	25, 279
教尊(興正菩薩)	227, 228
惠林(祐譽)	315

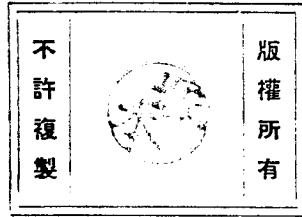
カ行

圓基(淨土寺僧正)	112
圓證	98
圓照	370
圓成僧正(乘徳琳慶)	314
圓純(摩蓮社師譽)	355
圓問(玄譽)	14, 350
小倉入道(宇都宮蓮生)	166
大江廣元	165
白粉屋五兵衛	393
織田信長(總見院)	282, 325, 333
織田秀勝	80, 81, 283, 334
蔭涼軒	329
珂憶(玉手安禪寺)	351, 352
珂然	351
賀茂齋院主禮子内親王(賀陽門院)	13, 280, 303
賀茂縣主重助	11
賀譽上人(明蓮社)	323
嘉樂門院	183
覺源	190
覺阿彌陀佛(法蓮房)	116
覺生	210, 213
覺如	90
覺明房長西	220, 224
覺瓊(出雲路住心房)	212, 220, 224
岳譽清蓮(周雄禪師、眞深)	315
梶井宮(應胤親王)	76, 325
勝石兵部景泰(漆氏)	6
烏丸蓮光院責任	182
烏丸大納言聖光	124, 318
神澤與兵衛(杜口)	395
觀覺得業(智鏡房)	25, 26, 279
觀明房遍空	210, 212
感聖(定生房)	211
關通	299
喚譽(五劫院)	353, 382
懷山任阿(玄蓮社師譽)	397

昭和拾貳年九月五日印刷
昭和拾貳年九月十日發行

淨土宗史之研究乾奧附

定價金參圓五十錢



編輯人	塚本善隆	京都市中京區三條通大宮西、妙泉寺内
印刷所	株式會社 共榮舎印刷所	京都市神田區三崎町二ノ十一
印刷人	百木智穂	京都市神田區三崎町二ノ十一

發行所

伊藤祐晃師遺稿刊行會

京都市中京區三條通り大宮西入ル妙泉寺内

電話西陣七四四九番
振替京都六八五四番

Handwritten signature or mark.

第七章 信行禪師の三階佛法に就て

凝然の「五教章通路記」に、「藏經中に「三階集錄」五卷あり。諸經論の正文を引て教義を成立す、而して前後雜亂始終混同して、義意見へ難く、宗旨得難し。」との記事あり。當時の大藏經中、既に此書のあるを知るべきたり。

予の見たる信行の三階教に關する最初の所見は、記主禪師の「選擇傳弘決疑鈔」の第十四篇に見える。此但是佛、接引之言。或是遠聲、作近聲、說。是第二階法。或言別時之意、種々異解、不信即生」の語なり。

聖阿師はその「直牒」にこれを解して、「或是れ遠聲等者、聲者名也、言ころは逆者に於て二階三階の別あり、第二階の五逆は、根利にして障り重きの故に、一行を修して往生すべし、觀經の所説是れなり。第三階の五逆は、根鈍にして障り重きの故に、普賢普正の法を以て往生すべし、念佛の一行を修しては往生すべからず、大經の唯除是也、今の言は五逆の稱の等しき故に、第三階の遠き名に、第二階の近き名を説くものにして、實には遠き名を生ぜざるなり。云々」と説けり。阿師に次で稍々詳細なる注解を加えしものは、藤田性心の弟子なる持阿の「選擇決疑鈔見聞」なり。即ち、

或是遠聲近聲等者とは、信行禪師の事なり。彼師の意は、機に三階を立て、法に普別を明す。機の三階とは、三賢等は第一階也、十信は第二階也、信前は第三階也。法の普別とは、通じて諸佛等を念するを普信普正の法と名く、別して一佛等を行するを別信正法と名く。然るに第二階の人は、別法を行じて得脱し、第三階の衆生は唯だ普法に依て得脱すべき故に、今彌陀を念するは別法也。然るに第三階の機に對して別法を説くは方便の説也。第三階を遠

Quote regarding 3 periods from

It's the

good quote!

聲と云ふなり。聲とは名なり、此三階に付て三重あり、群疑論第四に云く、然るに禪師、其三義を以て教を尋ね知ぬ、是れ當根の法門なり、一には時に依り、二には處に依り、三には人に依る。已上、時に依るとは、信行禪師の「三階佛法集錄」に云く

大乘經に於て三分を信ず、佛滅後初の五百年に第一階、次の五百年第二階、次の一千年第三階時已上。次に處に依るとは、彼の「集錄」に云く、一切娑婆世界を亦一切五濁惡世界なりと名く、位を判する是れ一切一乘世界に非ずして、唯是れ一切三乘世界なり、「大集」及「十輪經」の説の如し已上。之に准するに、淨土は是れ第一階一乘世界なり。一切娑婆は是れ第二階三乘の世界也。又第三階を兼ね。

後に人に依るとは、「集錄」に云く、一切第一階は、佛法内一切利根一乘の衆生、乃至一切第二階は佛法内一切利根三乘の衆生、乃至一切第三階は佛法内一切利根及び空見有見の諸佛化せざる斷善の衆生也。一切最大鈍根已上。又云く、滅後一千年已後は、一切道俗、利鈍を問ふ事莫く、皆悉く邪見顛倒と名く。唯一切破戒無戒兩處の衆生のみあり。已上

と見える。この論議は其源と懐感の「群疑論」なり。「群疑論」は三祖が「決疑鈔」に引かれた「或是遠聲作近聲、說或是第二階法」を初として、第三卷には問答を施して、「曰く諸餘の大徳は誤て經文を解すべくとも、信行禪師の説は是れ四依の菩薩なり、寧ぞ此聖教に於て亦錯解あるべけんや」と尋ね、次に之を釋して三階の譯解を返駁しつゝ、第四卷に於て、然るに禪師は、其三義を以て教を尋ねて是れ當根の法門なりと、一には時に依り、二には處に約し、三には人に准す、詳かに禪師此三門を立て、諸の教意を求む。謂つべし妙は即ち妙なり、能は即ち能なり焉、然るに古來の盛徳

贖を幽微に探り、學、内外を該ね、義、半滿を兼ね、法門の巢穴を窮め、眞乘の秘藏を究むと雖ども、未だ禪師の如く宗旨を判するものは有らず。然るに禪師自ら其義を立て、而も自ら其趣に乖けり。何んとなれば、觀經に言く、如來今日草提希、及び未來世の一切の凡夫の煩惱の賊の爲に害せられる者を教て、清淨業を説くと。及び未來世とは、惡時也。爲煩惱賊之所害とは、惡人也。此れ茲の穢土を教化するは惡處也、然れば此經に斯の三義を具せり、計るに是れ當根の佛法なり、禪師當根ならずと言ふ、何の意ぞや。「維摩經」の八法は、未來世の爲なりと言はざれば、惡時に非ざる也、菩薩八法を成就すと云へば、惡人に非ざる也、唯茲の穢土を化する事有るのみ、是れ惡處也、此經には斯の一義あつて彼の二門を闕く、而して當根と言ふは何の義ぞや。

と懷感禪師は鋭どい一矢を信行に向けてゐる。

わが淨土宗の三祖良忠上人の門人乘圓道忠は「群疑論探要記」を作り、其第六卷に「續高僧傳」の「釋信行傳」を引いて詳述せり。今之に倣ふて彼れが閱歷の一斑を紹介せん。

釋信行、姓は王氏、魏郡の人なり。其母久しく子なし。佛に就て祈誠す。夢に神、兒を擎けて告て言く、我今持して以て相與ふと、寤已に覺て常日に異なり、因て即ち娠あり。行の生るるに及んで、性恒准に殊なり、年四歳に至り路に牛車の泥に没し牽き引くを見て、因て悲泣して止まず。出家して博く經論に涉り、情理遐に擧す、時を以て教を勸す、病を以て人を驗む、自ら藥輕病重を知り、理、勤苦を加え、力を竭して之を治す、凡そ影塔あらば、皆周行禮拜遶旋翹仰して因て來世、佛を敬ふの習と爲す、斯一行を以て、通して餘業を例す、其克嚴詳據率ね此の如し、後ち相州の法藏寺に於て具足戒を捨て、親ら勞役を執て諸悲敬に供す、禮道俗に通じ、單衣節食、時倫に挺出す、冬夏に

擬する所、偏に恒習に過ぐ。故に四遠の英達するもの皆門に造て而も之を詰問す。行事に隨て直に陳す、曾て曲指なく、諸の聞て信する者、其言を頂受せざること莫し。章疏を捨て、其化に従ひ稟けて教師の禮を爲す也、開皇之初、召されて京に入る、僕射高穎、邀之延いて眞寂寺に住せしむ。此年如來一千五百三十四年也、院を立て、之に處らしむ。乃ち「對根起行三階集錄」、及び山東制する所衆事諸法合して四十餘卷を撰す。引文據類、前後風を望み、翕然として其聚を成す。又京師に於て寺五所を置き、即ち化度、光明、慧日、弘善寺是也。爾より餘寺共度を贊承。六時禮旋乞食を業と爲さざること莫し。虔慕潔誠及ばざる如き也。

宋平病甚し、力を佛堂に勉め日別に像を觀す、氣力漸く衰弱しければ、像を請じて房に入れ、臥視して卒するに至る。春秋五十有四。即ち十四年正月四日也と、其月七日化度寺に於て、晨を起す由の對馬の阜に送る。道傍號泣して聲京邑を動す。身を捨て骨を收む、兩耳通焉、塔を樹て碑を立て、山足に在り、居士逸民河東の裴玄證なるもの文を製し、證本出家して化度に住せし、信行を師とせり。凡著述する所、皆證の筆に委す。末に俗服に従ひ、尙驕豪を絶ち、自ら徒侶を結で更に科綱を立て、返道の省同じく贊贊する所、自ら碑を製し、死して方に鑄勒塔所に樹つ、即ち至相寺の北巖の前三碑峙列するもの是なり。

初め信行の異迹を物與するや、時に或は譏を致す、通論に詳なる所未だ甄別すべからず。但し奉行刻峭偏薄不倫なり、佛宗に至ては亦高衢の一術なる耳。著す所の集記並に正文を引く、然るに其題を表し、名を立る定れる准的なし、對根起行と曰ふと雖も、幽隱弊を指して標榜すれども事を語る濇淪なり、來哲の儼詳にして幸に據るあることを知れ、開皇の末歲勅斷して行はず。別に本傳あつて世に流る、費節の「三寶錄」に見ゆ已上。

光宅寺の法華經のLineage.

「五教章」の上に云く、梁朝の光宅寺の雲法師に依るに、四乗教を立つ、謂く、臨門の三車を三乗と爲し、四衢に投ぐる所の大白牛車を方に第四と爲す。彼の臨門の中の牛車も亦羊鹿に同じく俱に得ざるを以ての故に。餘の義は上に辨するが如し。後代の信行禪師此宗に依て、二教を立つ。謂く一乗と三乗となり。三乗とは即ち別解別行及び三乘差別なり、并に先に小乘に習ひ、後に大乘に趣く是也。一乗とは謂く、普解普行唯是れ一乘なり。故に知ぬ、信行禪師は梁の光宅寺の法雲法師の流徒なるのみ。

「自鏡録」に云詳 神都福光寺の僧某、一時に忽然として業道の中に逐ふ、信行禪師を見るに大蛇の身と作れり、遍身惣して是れ口なり。又三階を學ぶ人の死を見れば、皆此身の口の中に入る、去る處を知る莫し、其僧却て活る、此に因て京に來向して僧靜禪師に報す、僧靜信せず、遂に即ち却て都に歸向す矣。僧靜の信ぜざるは、應に禪師の徒なるべし云云。

「歷代三寶記」に云く、(開皇十七年)費長房の錄の中に、初て信行の選述を列す。而して後、同二十年、制斷して流行を聽さず。上。]

「自鏡録」に云く慈門寺の僧孝慈、年五十なるべし、幼少より已來、信行禪師の三階の佛法を説くを聽きて、苦行を修す。毎に三階の佛法を説いて言く、大華經を讀誦すべからず、讀誦する者は十方の阿鼻地獄に入る。須らく懺悔すべし、後に一時岐州に在て、三階の佛法を説く。于時一の優婆夷あり、法華經を持てり、又有縁を勸めて同じく法華經を持せしむ、其禪師、彼の法華經を持てる優婆夷等に勸めて言く、汝等法華經を持すも根機に當らざれば地獄に入るべしと、勸めて誦を捨てしむ。遂に數箇の優婆夷あり、法華經を持することを捨て、禪師の處——衆の中に於て法華經

を持てる罪を懺悔す。其元首法華經を持つことを又勸む。優婆夷情の中に合せず、遂に大齋日に於て、禪師衆の爲に三階の佛法を説く、此時に當りて座下に萬人以て來れり。其優婆夷大衆の中に於て香を燒き、願を發して言く、若し某乙、法華經を持すること佛意に稱はざれば、願くは某乙見身に惡病に着て、大衆をして共に法華經を持すれば、此罪報を得ると知らしめ給へ。又願くは生身に阿鼻地獄に墮て願くは衆をして同く見しめ、若し某乙法華經を持つて佛意に稱順せば、禪師も亦爾なりべしと、此優婆夷發願の時に當て、其禪師普を飲んで語らず、高座の上に向して集録を唱る者も亦音を失して語らず。更に五箇の老禪師あり亦音を失して語らず。其先きに法華經を誦するを捨てたる數人此に因て更に發心して法華經を誦する願重を生ず。當に知るべし、信行は自願々他智を誰か悲まざるや、責れとも而も飽ざるをや。十五家の中に誤の最も重きこと斯より甚しきは無し。今廣く徵破す。云々、

以上は我宗典を中心とする管見に據る、三階教に關する大要にすぎず。(これ等を一々支那の根本文獻に對比攻究すれば、宗典には引用の誤もあるべし。されば今はあへて之を檢討訂正せず。)其他各宗に通ずる典籍を廣く考覈すれば、恐らくは際限なかるべし。唯「自鏡録」の信行大蛇身となれりとの説と、孝慈の闍歴は、永く諸宗に通ざる説話なりしと見えて、法然上人を彈劾せる南都興福寺奏狀九箇條中に左記の文あり。

昔信行禪師之立三階行業。孝慈比丘之止一乘讀誦。全不輕大乘。量末世機。制止其行。然信行成大蛇身。百千徒衆住其口中。孝慈當鬼神之害。士人同類忽臥高坐下。謗大乘業罪中最大。雖五逆罪復不能及。是以彌陀悲願引攝雖廣。誹謗正法捨而無救。於戲西方行者所憑在誰乎。

又日蓮の「撰時鈔」には、

第七章 信行禪師の三階佛法に就て

漢土の三階禪師の云く、教主釋尊の「法華經」は、第一第二階の正像の法門なり、末代のためには我がつくれる普經なり。法華經を今の世に行ぜん者は、十方の大阿鼻獄に墮つべし、末代の根機にあたらざるゆへなりと申て、六時禮懺四時坐禪、生身佛のごとなりしかば、人多く尊みて弟子萬餘人ありしかども、わづかの小女の法華經をよみにせめられて、當坐には昔を失ひ、後には大蛇になりて、そこはくの檀那弟子並に小女處女等のみ食しけり。今の善導、法然等が千中無一の惡謔もこれにて候也。

同書又云く、

眞言の善無畏、禪宗の三階、淨土の善導等佛教の師子の肉より出て來る蝗蟲の比丘なり。

日蓮は此の如く「自鏡録」の孝慈傳を、信行の事と混淆誤讀して、惡罵すること例の如し。果して然らば信行は、天台の智者大師とは四歳の年少にして、大師に先んずる事二年にして寂す。道綽禪師に見たること二十一歳、三論の大成者嘉祥寺の吉藏より八歳の長にして、淨影寺の慧遠に弟たること十八歳。梁の武帝の大同七年に生れて、隋の開皇十四年正月四日世壽正に五十四歳にて卒す。予癸年、増上寺統譽圓宣の「挫僻打磨編」を讀む。其中に曰く、予嘗て「三階集録」を見る、其舛頗る相類す（親鸞教行信證）蓋し是れ僻解者流の風格なる耳。下卷又云く、

凡そ見に邪正あり、邪僻にして能く一家を立つ者古來少からず、且く其一を出せば、彼の三階の魁首たる信行等の類の如き是なりと。

凝然、乘圓、日蓮當時の藏經中には「三階集録」五卷の存在せることは、以上の記述にて明瞭なり。然るに現藏中

には、此書散逸すること既に久し、聞く奈良正倉院御物中に二卷あり、又法隆寺書庫に兩卷ありと。龍谷大學之を臨寫せるも都合四卷の缺本なるを免れずと。かゝる次第なるを以て、予は到底此書を手にし信行の思想を直接窺ふことは、不可能の事と親念せり。

然るに統譽圓宣之を見たりと傳ふ。圓宣は増上寺五十二世の主、享保三年の生で、寛政四年五月、七十五の寂なれば、今より凡二百四五十年前の人なり。少壯の頃、京師に在つて研鑽せるの經歷あり。之を以て昨秋關東の大震災に、東大書庫焼亡に關する談話の序、之を京都大學教授某博士に告ぐ、未だ幾ならず、本年初春の交、博士予に教て云く、此地臨濟宗興聖寺に於て三階佛法五卷を發見すと。予欣懐、是を借覽臨寫熟讀するの機會を得たり。茲に於て統譽の指摘せる眞宗との類似點を具體的に知る事を得たり、仍て二讀過眼、類似點の大概を左に列學せむ。

信行禪師と親鸞聖人との類似點の第一は、捨戒である。信行の捨戒は今日の勞働者の様に、親ら勞役に服し、之を諸悲敬に供するので單衣節食、實に時倫に挺出したと云ふのであるから、一燈園式の勞働托鉢であつたらしい、そこで窮屈なる具足戒は、到底持つことは出來ぬ、親鸞聖人は承元丁卯の歲、本師源空法師並に門徒數輩、罪科をかんがへずみだりがはしく死罪に坐す、あるひは僧儀を改め、姓名をたまうて遠流に處す、予はそのひとつなり、然れば既に僧にあらず、俗にあらず、この故に禿の字をもて姓とすと謂ふのである。その捨戒の主旨に於ては兩者相違あつても、僧侶一般の戒法を捨てた點が最も克く酷似して居る。

第二に信行は對根起行を最大主眼として、破戒持戒、利根鈍根を問ふことなく、應病與藥の教旨を標榜し、續高僧傳の所謂幽隱躰を指して事を語る。最も清淪なりと評せるが如く、巧は則ち巧、妙は頗る妙なり。衆萬人を集めて其

5 points of
similarity
1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

言を頂受せざること莫く、直に從來の章疏を捨て、其化に従ひ、寧けて父師の禮を爲すと云ふのであるから、其一時の盛は蓋し異常のものであつたことと想像する。

親鸞の、東國から歸京してから九十歳にて入寂するまでの稍々長日月の消息は、杳として知れぬが、關東に於ける化導は頗る之に類するものがあつたらしい。信行の京師に於ける、化度、光明、慈門、慧日、弘善等の五寺を置くこと云ふ盛大さはなくとも、滅後、覺如、存覺の活動せし頃の隆盛は恐らく、又信行の及ばざりし處であつたであらう。對根起行と信心爲本とは主義に於て相違あるも、一世の人氣に投じ、其下層民に一大印象を與へ、一世を風靡せし點が、頗る相酷似して居ると思ふ。

第三には信行も親鸞も俱に同行主義である。「數異鈔」に親鸞は弟子一人も持たず。其故は我計ひにて人に念佛を申させ候ばこそ、弟子にても候め、偏に彌陀の御催にあづかりて念佛申し候人を、我弟子と申事、極めたる荒涼のことなりと云へり。之れ一名、門徒衆の起る所以で、此宗旨にして此主義を採る最も巧妙なりと思ふのである。信行は三階佛法の中に、一切善知識を求め、一切衆生を度するに唯同行第一、常隨喜第二、常見第三、常聞第四、常求第五、と稱し一切衆生と八戒等の行を一日一夜身口意等一切相捨離せず、又一切衆生と五戒八戒二百五十戒等の行を、同行して盡形まで身口意等一切相捨離せず、一切菩薩戒行等も同行して、乃至成佛三大阿僧祇切身口意等一切相捨離せず、持戒同行する亦是の如しと云へり。信行が捨戒の動機は、此等あらゆる機類と共に、諸種の脩行を同行同脩するには、具足戒を嚴守することは、到底可能なるを以て、自ら先づ捨戒せしは、精神的にも、その一切衆生に對する勞働奉仕の意味は、充分知らるゝのである。

今日より眺むるときは、信行の教相に於ける大なる缺點は、大乘と小乗とを混淆せる缺陷であるが、是れは當時未だ今日の如く、大乘小乗が判然と區別せられざりし時代なれば、信行が此點を混用し、後世前後雜亂宗旨得がたしとの批難を蒙るに至つたのも、亦無理からぬ事情と謂はねばならぬ。信行が屢々一種相似と云ふ判釋語を使用して居るのも、かゝる批難に應へむが爲のものであらうと思ふ。

第四に信行も、親鸞も、均しく在家布教がその所詮であるからでもあるが、俱に山林寂靜なる地點を避けて、概ね聚落に出で、教化に努めて居ることである。剃頭染衣して山林閑靜にあつて、修行する所謂小乘的苦行は、信行の最も忌避した處で、彼れは「之を常に山林閑靜に在て野獸の如く死す」と嫌つて居る「何故なれば一切三寶寺の諸種の業務も、總て是れ一切聚落内が最も多きが故なり」と喝破してゐる。其標榜する對根起行は、素より麻痺與藥の相當對治を主眼とするものであるから、自行よりも寧ろ化他を以て本旨とするは、當然の主張と謂はねばならぬ。是れ鎌倉時代の親鸞が、非僧非俗を標榜して、専ら在家救済に成功せる一面の眞理である。

第五には、俱に教相判釋に複雜と混亂を免れぬ弱點である。信行は機法俱に之を三階に分別することは、言ふ迄もなき事であるが、法に別眞別正と普眞普正の二を分ち、時、處、人三類に據て得益の異同を區別し、其中娑婆世界を以て、絶對濁惡の三乘世界なりと判するのである。是れ親鸞の末世濁亂の世界には、念佛の絶對他力の外、凡夫には少分の諸行をも許さず、廻向の力用をも皆彌陀より賜ふものであると謂ふに似て、此處に彼此共にその特長もあり、亦缺陷も存する次第である。信行は普眞普正の自分の主張を飽迄主張せんが爲めに、娑婆世界を絶對濁亂なりと斷ずると共に、三乘を以て破戒無慚の凡夫と同視すると云ふ缺陷を生ずるのである。佛滅後一千年後の衆生は、絶對破戒

無慚のものにして、三賢十信は第一第二階に相當し、別眞別正の一佛を行ずるは、滅後一千年後の修行に相當せずと斷じ、その普眞普正の法を末世相應の法なりと主張するのであるから、淨土門の別眞正法とは、恰も正反對となる譯である。因に謂ふ古來信行の著作には、其題を表し名を立て定まれる准的なく、或は「三階集錄」と號し或は「三階佛法」と云ふ。蓋し門人證玄の、京師化度寺に於て執筆せるものたることは、既に「綴高僧傳」載する處の如し。予が借覽騰寫の原本また「三階佛法」と表せり。讀者之を諒せよ。(未完)

第八章 淨土宗の三大法難

我宗の三大法難とはいふまでもなく、その第一は承元の法難(宗祖の遠流)にして、土御門帝承元々々年(建永二年十月廿五日改元)二月廿八日、法然房源空を土佐國に配流に處せる事件なり。その二は嘉祿の法難、即ち法然上人滅後十六年、後堀川帝安貞元年(嘉祿三年十二月十日改元)六月廿二日、叡山々徒法然房源空の大谷の靈廟を破却せんと企つ。仍て其夜法蓮、覺阿等、妙香院僧正に謀り遺身を發掘して曝曬に遷す。ひひて隆寛、空阿彌陀佛、金光房、幸西等が諸國に流謫せられし事件なり。第三は大永の法難、法然上人滅後三百十二年、後柏原帝大永三年、百萬遍知恩寺と東山知恩院との未だ争論にして、詔ありて知恩院を以て知恩寺の別院となす。茲に於て天台座主青蓮院兼法親王高野山に隠れらる。仍て叡山三塔相ひ僉議して、朝廷及び幕府に嗽訴し、幕府は干戈を擁して知恩寺を護衛するに至りし事件なり。

第一は法然上人立教開宗に伴つて、南都北嶺の衆徒、朝廷に嗽訴せるものにして、その二は隆寛と並榎堅者定照との宗論に端を發し、遂に山門の暴動を觀しものにして、第三は全く知恩院知恩寺の本末争論に基くものにして、青蓮院山主は、知恩院に加擔し、山徒は青蓮院の關係よりしてこれまた知恩院に加擔す。これに對して時の幕府、並に前内大臣三條西實隆等は知恩寺側にありて、之に持抗せしものなるが、この三大法難共に、直接間接の差は有りと雖も、何れも山徒と關係あるは又奇なりと云ふべし。然り而して此三大法難は、共に我淨土門、法然上人門下正統に於ける無比の大難にして、實に一宗興廢に關する大事件たりしが、亦この三大法難によつて、却つて我宗の宗風一段の赫奕を増し、宗勢頓に上がり、終に淨土門中の正流として、今日の隆盛を見るに至れり。一國の盛衰も、その契ひ來る國難